

八戸における都市地域の形成

大手宏秀

1. はじめに

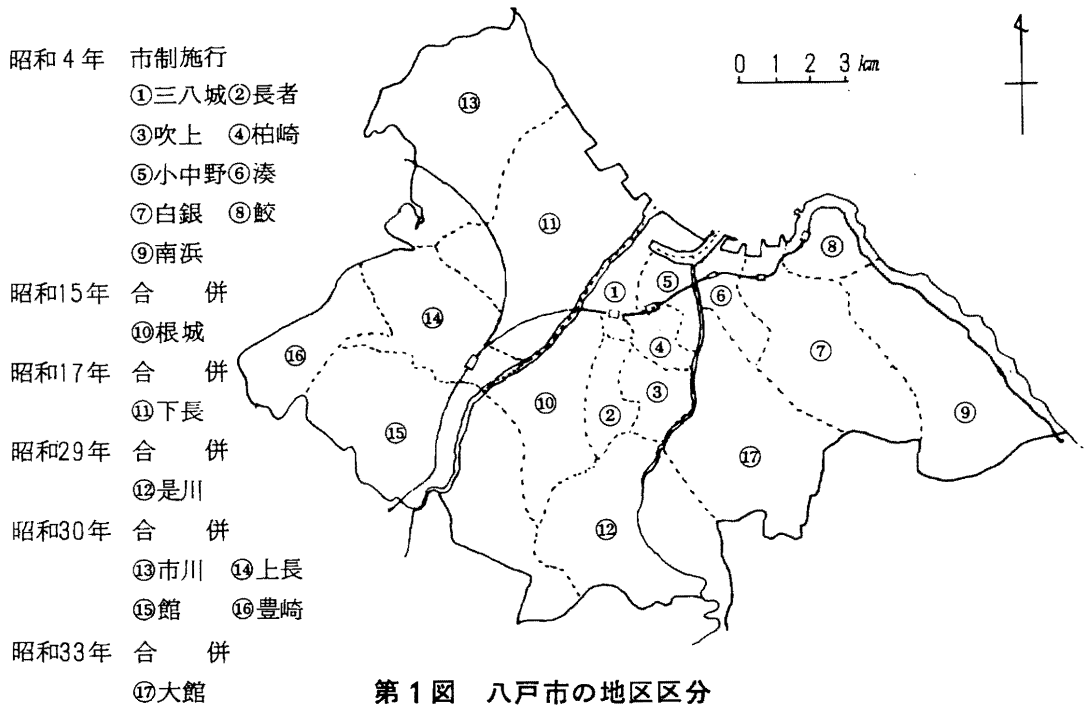
封建時代に成立した近世城下町は、軍事的意義や身分制を反映して、そのほとんどが独特の町割がなされた。そうした景観的、機能的特徴は、何らかの形で現在の都市へも反映している。これから論述する八戸市も、近世城下町のひとつであるが、その研究は、ほとんどが工業都市としての八戸を分析したものであって、城下町としての八戸を著したものは、あまり見られない。

そこで、まぎれもなく工業都市としての性格を持つ八戸市に対し、旧城下町起源の町としての面からアプローチしてみたいと思う。

研究対象地域は、旧八戸城下町であった地区と、港に沿った小中野から鮫までの地区である。これらの地域について、市街地形態の変化、拡大を見ていくことが本論の目的である。

2. 地域の概観 (第1図)

市制施行時(1889年)、八戸市の人口は4.6万人であり、市域は46.50km²であったが、現在(1984年)では、人口241,000人、市域は214.65km²となり、それぞれ4.7倍、4.5倍にまで発展した。



また、市街地は、八戸台地末端にある旧八戸町から、小中野、湊、白銀、鮫地区へと続くコーナーションを形成している。

八戸市は、全国有数の水産都市でもあり、魚介類の加工業が盛んである。さらに、新井田川河口、臨海に工業地域が広がっている。

3. 八戸城下町の形成と市街地形態

(1) 近世城下町形成以前

八戸地方には古くから人が住んでいたが、八戸の地が歴史に姿を現すのは、この地に根城を築いた（1334年、建武元年）、南部師行以降である。

(2) 城下町の建設

八戸の町づくりは、1626（寛永4）年に、根城南部氏が遠野に移封されたときに始まる。根城の旧城跡に代って、新たに八戸に町が形成された理由は不明確であるが、防御上地形的に優れていること、輸送拠点としての役割が考えられる。

八戸の町づくりの過程ははっきりしていないが、「盛岡藩雑書」等の資料を見ると、ほぼ1650年代までには、都市としての機能が一応整備されていたことがわかる。

(3) 市街地形態

江戸時代末期の八戸の様子をよく表している「文久改正八戸城下絵図」をもとに作成したものが第2図である。

図によると、町人町は、南西から北東へ向う街道と、南東へ向う久慈街道に沿って形成されている。城下の中心は、城の大手と湊街道に至る街路が交差する地点であった。

武家屋敷についてみると、城郭付近は一族、重臣の屋敷に、また城下南縁は下級武士の屋敷に当てられていた。その他各街道沿いには足軽屋敷が配置されていた。

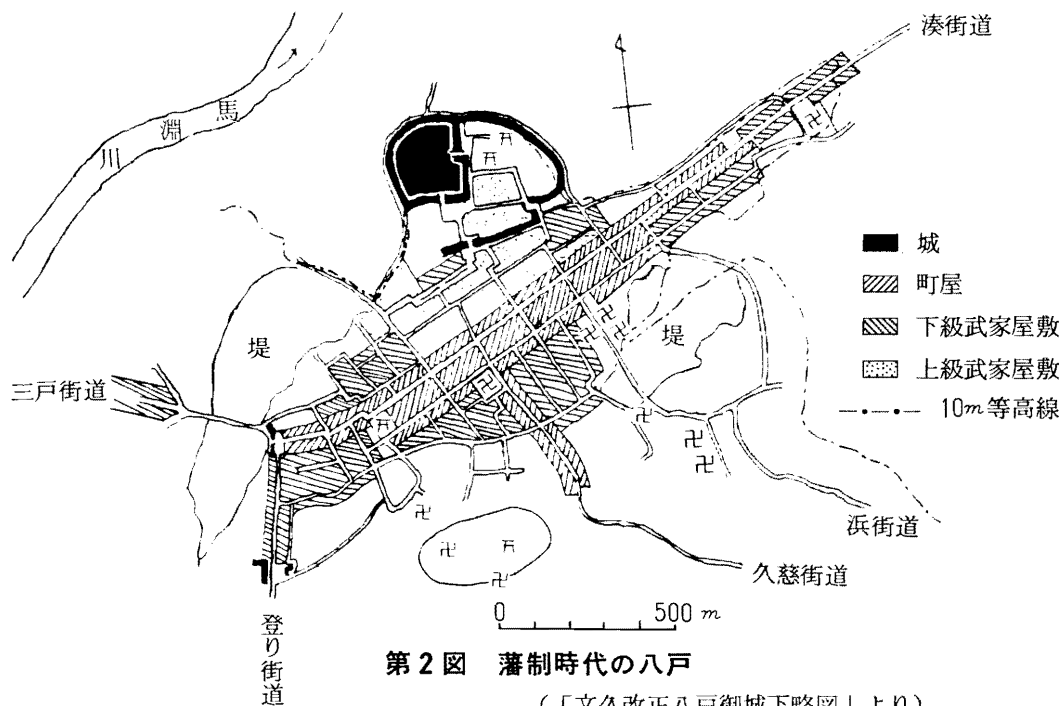
社寺は、城下南西の長者山頂・山麓、および浜街道沿いに配置されていた。城下町においては、社寺を支城の役割を持たせて配置することが多いが、八戸城下についても同様であったものと思われる。

街路についてみると、整然とした直交を基準としながらも、城の大手へ一直線に到達できないように工夫されていた。また、登り街道、三戸街道が城下町に入る場所では、柵型・惣門が設けられ、厳重なチェックがなされていたことがわかる。

以上、城下町の特徴を述べたが、地形を有効に利用し、町人町を包み込む形で武家屋敷が配置されており、町人町を重視した城下町形態であるといえる。

(4) 港灣の状況

八戸藩の成立とともに、海上物資輸送が始められ、浦奉行が置かれるなどして、17世紀から18世紀初めには、港町の形成・整備がなされていった。実際、八戸藩は、藩内での米の自給自足が無理であり、他産業の振興、物資流通拠点の確立へ活路を見い出さなければ、藩の存続ができなかつ



第2図 藩制時代の八戸
 (「文久改正八戸御城下略図」より)

たのである。

4. 明治期の八戸

明治27年発行の「八戸実地明細絵図」によると、市街地形態は、江戸期と比べてほとんど変化していない。また、八戸、小中野、白銀、鮫は、互いに独立した集落である。

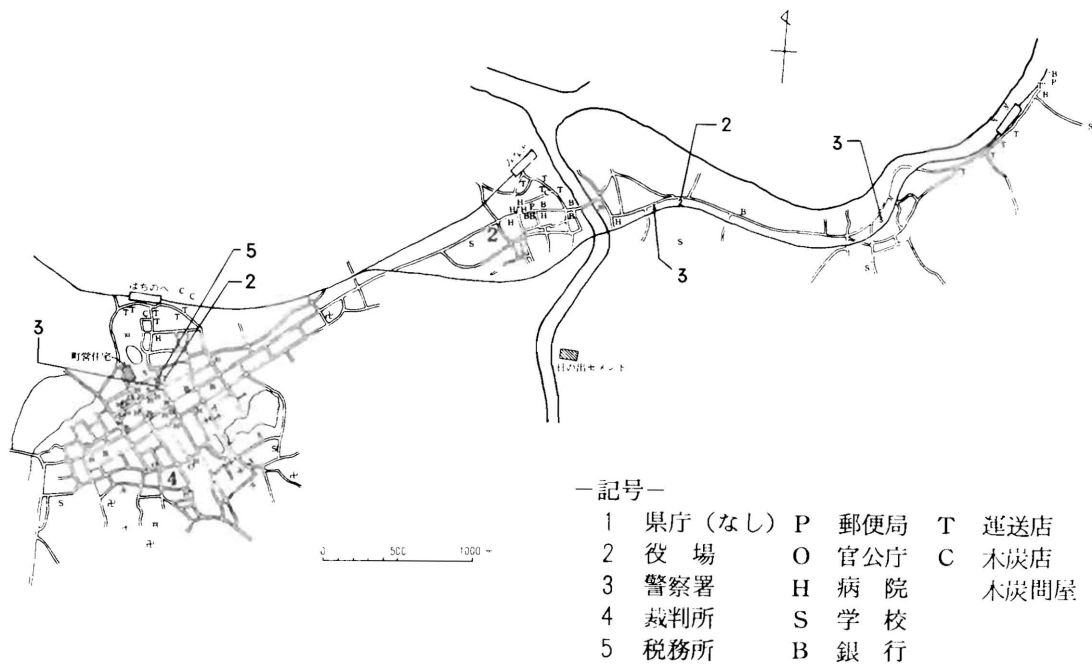
同絵図によると、当時の三日町、十三日町には30軒ほどの店が示されており、活発な商業活動が行われていたことがわかる。

5. 大正時代の八戸

第3図は、大正14年発行「大日本職業明細図之内」をもとにして作成したものである。役場、警察署、税務所が、堀端町、番町に集積し、業務地区を形成している。内丸地区は西側は公有地、東側は住宅地となった。

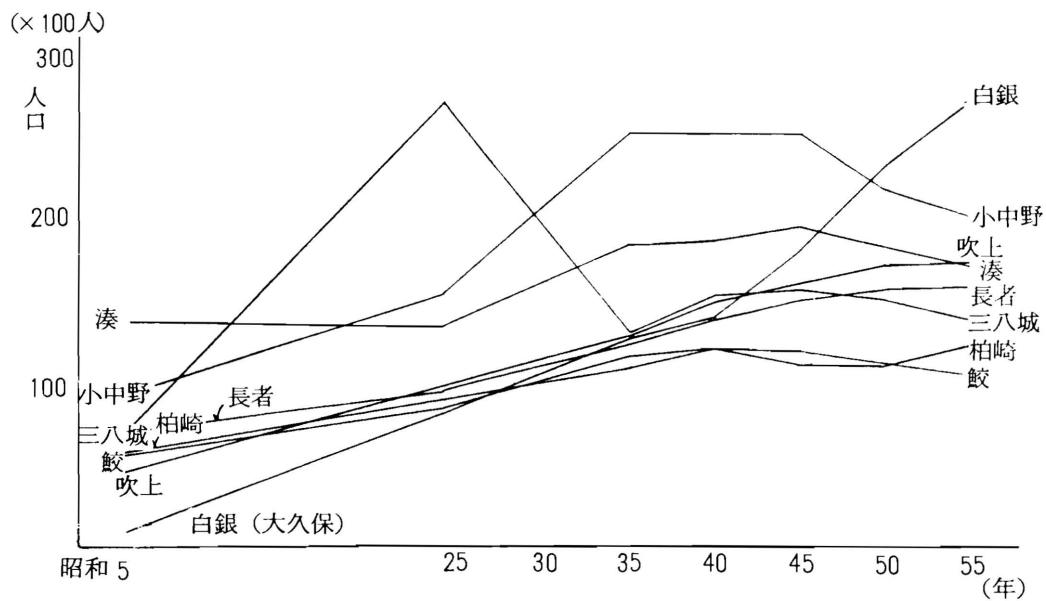
商業地区は、十三日町、三日町、八日町付近と、小中野新丁通に見られる。

第3図ではこのほか、いくつかの特徴的なことが示されている。第1に鉄道駅周辺の木炭店、運送店の集積である。当時の八戸が付近の木炭の集積地であったことがうかがえる。第2には、1919年設立の日の出セメント工場の存在である。本工場は、八戸初の近代工場であって、工業都市への発展の布石となった。第3として、鮫村への旅館の集積である。これは、周辺の観光地化がなされたものであろうか。



第3図 大正時代の八戸

(大正14年発行「大日本職業明細図之内」より)



第4図 地区別人口の推移

(八戸市統計書より)

6. 昭和初期の八戸

昭和4年、八戸、小中野、湊、白銀、鮫の各町村は合併して八戸市となった。当時の市街図を見ると、市街地そのものの目立った拡大は見られないものの、八戸と小中野のコナーベーションが認められるようになった。また、内丸地区は学校の集積が進み、さらに公共的色彩が強くなってきた。

7. 昭和期の人口動態

第4図は、国勢調査などをもとに、地区ごとの人口動態を見たものである。昭和40年代の高度経済成長によって、中心部での人口の増加が起った。しかし、それに呼応して旭ヶ丘をはじめとする周辺住宅団地の造成が行われ、現在では、市周辺部での人口増加が目立ち、中心部の減少が進行中である。

8. 昭和50年代の八戸

(1) 内丸地区

かつて城郭であったところは公園となった。それ以外の内丸地区西側は、学校が郊外へ移転するとともに、公会堂、市庁舎が建設され、公共業務地区を形成している。

(2) 商業地区

城下町における町人町がほぼそのまま商業地域を形成している。南北方向への発展はあまり見られない。

(3) 住宅地区

対象地域の住宅地は、旧城下町における中・下級武家町とほぼ重なる。しかし、内丸東側は、かつては一族の屋敷、および神社があったところで、例外といえる。

市の発展によって、城下町時代に周辺部であったところが、むしろ中心地区に含まれるようになっており、スーパーなどの商業機能の立地が進んできている。

(4) 小中野・湊地区

この地区は、市制施行当初から人口の多い地区であり、江戸時代から昭和初期においては、最も発展した地域といえることができる。しかし、その後の軍需景気、高度成長期において、都市計画がなされないまま、住宅・工場の充てんがなされていき、現在では、商業・工業・住宅の混在する劣悪な環境となっている。

9. ま と め

これまで、八戸市の発展を旧城下町との関連から述べてきたが、旧城下町から発展した市中心部は、景観的に見れば大きな変化を遂げたものの、機能的にはさほど変化していない、ということができる。街路にしても、江戸時代の形態が比較的良く残されている。むしろ、都市化の波に乗り、

大きく変化させられたのは、小中野・湊などの臨海地域であり、周辺部であった。

今後も、八戸市は、周辺地区の都市化という形で進んでいくと思われるが、中心部と周辺地域の統一的な結びつきによる発展が求められるであろう。

本研究に指導・助言を与えて下さいました後藤先生、水野先生、八戸工業高等専門学校の堀田先生、さらに、資料収集にあたって協力していただきました、八戸市立図書館員、および市企画調整室の方々に深く感謝いたします。

【参考文献・資料】

- 高島成侑・三浦忠司（1983）：南部八戸の城下町 340 頁
- 西村 嘉（1977）：八戸の歴史 270 頁
- 堀田報誠（1976）：八戸港史 — 6 都市編 八戸港史 233～244 頁
- 工藤祐董（1974）：八戸藩家臣団の階層構成 八戸工業高等専門学校紀要 第9号 103～115 頁
- 八戸市統計書：昭和44年，昭和49年，昭和59年
- 八戸市統計だより：昭和24年 第6号
- 八戸市市勢要覧：昭和5年